

TSS開始時のコマンド自動実行機能について： PROFILEプロシジャの使い方

末永, 正
九州大学大型計算機センター研究開発部

<https://doi.org/10.15017/1474924>

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 15 (1), pp.11-12, 1982-03-10. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：

TSS 開始時のコマンド自動実行機能について

- PROFILE プロシジャの使い方 -

未永 正*

九州大学大型計算機センターにおける OSIV/F4 の TSS では、TSS セッション開設時に自動的に実行する EXEC プロシジャ機能がある。具体的には、PROFILE・CLIST という名前でコマンドプロシジャ用の順データセットを作成しておけば、そのコマンドプロシジャが LOGON 時に自動的に実行するものである。この機能は、それ自身とりたてて言及することではないが、使い方によっては比較的便利な機能であるので改めていくつかの利用例を紹介する。

例 1) 独自のコマンドプロシジャを直接呼出し形式にする。

```
LIST PROFILE.CLIST
  F1234.PROFILE..CLIST
00010 PROC 0
00020 ALLLOCATE F(SYSPROC) DA(CMDPROC.CLIST 'QS.CMDPROC') SHR REUSE
00030 EXIT
      END OF DATA
READY
```

(注意) データセットを連結する場合には、その属性 (DSORG, RECFM, LRECL, BLKSIZE) が同じでなければならない。これらの情報は LISTDS コマンドで表示される。なお、同様なことは CHAINP コマンドによっても可能であるが、上記の条件を守る限り処理時間の点で本例の方が優っている。

例 2) 端末の標準行サイズの変更とセッション終了時に課金情報を出力するようにする。この指定は、バッチジョブ配下 [1] では無意味であるばかりでなくエラーとなるので、TSS 配下でのみ有効となるようにする。

```
LIST PROFILE.CLIST
  F1234.PROFILE.CLIST
00010 PROC 0
00020 IF &SYSENV=&STR(F0RE) THEN D0
00030                                TERMINAL  LINESIZE(136)
00040                                CALLM     CHARGINF
00050                                END
00060 EXIT
      END OF DATA
READY
```

例 3) 端末のコード系を JIS7 コード (カナ文字用) に設定する。

```
LIST PROFILE.CLIST
  F1234.PROFILE.CLIST
00010 PROC 0
00020 IF &SYSENV=&STR(F0RE) THEN D0
00030                                TERMINAL  N0TRAN
00040                                SETCODE  INTERNAL(KANA)
00050                                END
00060 EXIT
      END OF DATA
READY
```

* 九州大学大型計算機センター研究開発部

例4) 端末入出力メッセージを自動的にロギングし、作業履歴を蓄積する。

```
LIST PROFILE.CLIST
F1234.PROFILE.CLIST
00010 PROC 0
00020 IF &SYSENV=&STR(F0RE) THEN D0
00030                                ALL0C F(SYSTSL0G) DA(TSL0G.LIST) M00
00040                                LOG  START
00050                                END
00060 EXIT
END OF DATA
READY
```

例5) セッション開設時の記号パスワードだけでなく、疑似乱数による数字パスワードを設定する。

```
LIST PROFILE.CLIST
F1234.PROFILE.CLIST
00010 PROC 0
00020 SET  &A=&SUBSTR(4,&SYSTIME)
00030 SET  &B=&SUBSTR(5,&SYSTIME)
00040 SET  &C=&SUBSTR(7,&SYSTIME)
00050 SET  &D=&SUBSTR(8,&SYSTIME)
00060 SET  &TIME=&STR(&A)&STR(&B)&STR(&C)&STR(&D)
00060 SET  &KEY=&B+&C+10-&D
00070 IF &SYSENV=&STR(F0RE) THEN D0
00080                                RDPS:WRITENR &TIME ENTER  PASSWORD N0. &STR(:)
00090                                READ PASSWORD
00100                                IF  &PASSWORD^=&KEY THEN LOGOFF
00110                                END
00120 EXIT
END OF DATA
READY
```

(注意) 本プロシジャは、その使用目的から PERMIT コマンド [1] によって他のユーザから参照できないようにしておかなければ意味がない。また、作成次第では永久に LOGON できなくなる可能性もあるので万全の注意を払う必要がある。

参考文献

1. 末永 オペレーティングシステム OS N / F4 E40 について、九大大型計算センター広報、14, 1, 1981, 59-68.